

平成 21 年（2009 年）3 月 7 日開催

◇◇「岩木山の生き物・重層型シンポジウム」の報告 ◇◇

事務局長 三浦章男

このシンポジウムの狙いは「岩木山の生き物」が「生態系上」どのようなつながりの中で、総合的に関連した存在なのかを、重層的かつ多面的にとらえようとしたことである。

つまり、登山道を歩いていても、お目にかかれないトガリネズミやモグラなど小さな動物たちの生態から、山麓からブナ林内を移動するサルたち、また、上空を飛翔しながら餌を探すイヌワシやクマタカなど、そして、岩木山の伏流水や湧水に生息する魚類や甲殻類など…が生きる世界を「食物連鎖」という視点から「鳥瞰・立体」的に理解してもらうことが目的だった。

基調講演は弘前大学農学生命科学部教授の小原良孝さんの「岩木山に棲む小哺乳類モグラ・イタチの仲間」であった。

染色体から、岩木山に棲んでいる「モグラ・イタチの仲間」の特性を調べ、その変異を探ることが講演内容であった。

特に、その中で「岩木山に棲むイタチ類 5 種（オコジョ・イイズナ・イタチ・テン・アナグマ）」については興味深かった。

先生は弘前大学に赴任して間もなく「岩木山でオコジョを捕獲し」、そのきれいな染色体標本が出来たことが、「野生哺乳類」の染色体研究にのめり込んだ切っ掛けになったという。

それだけに、「イイズナ」と「オコジョ」については詳しく説明してくれた。

「イイズナ」は北方経由で日本にやって来た動物で「日本固有の種へと分化」したものであるそうだし、「オコジョ」は「染色体から見たイタチ科食肉類の系統進化」の上ではイタチ類の祖先型であるという。そのオコジョが岩木山の山頂付近にだけ、現在も生息しているのである。これは凄いことである。

そして、この「オコジョ」の生命を「餌」となり、支えているのが「ネズミ」類なのである。

生物進化の道筋は染色体に反映されているという。そして、最後に「木原均」氏の言葉「地球の歴史は地層に、生物の歴史は染色体に刻まれている」を挙げて講演を終わった。

小原先生の講演に続いて…「岩木山系の湧水と水生生物」と題して…弘前大学農学生命科学部准教授 東信行氏（本会会員）の説明と報告が始まった。

私たちが、沢や湧水で、普通に目にすることが出来る生きものという、トンボとそのヤゴ、それに脈翅目と毛翅目の昆虫がいる。脈翅目にはヘビトンボがいるが、これらはトンボではないトンボたちである。幼虫は水生で石の下などに潜み、カゲロウ、カワゲラ、トンボの幼虫などを食べる。

毛翅目にはトビゲラ類がいる。幼虫は水生で、木の枝や彼は、植物の破片、砂粒などに糸

をかけ巣をつくる。

甲殻類でニホンザリガニ、魚類ではイワナなど、それに、両生類ではサンショウウオであろう。少なくとも私は、沢や湧水でこれらの生きものしか目視したことはない。

ところが、東先生は旧岩木町一町田地区の「芹（せり）田」とそこに棲む生きものについて語った。

岩木山は登山道沿いには湧水は少ない。しかし、伏流水が山麓に「湧水」として噴出している場所が多い。旧岩木町の「水道・飲料水」はすべて岩木山の「伏流湧水」でまかなわれていたほどである。

「一町田の芹田」もそれを利用した「農産物」である。その「芹田」の湧水口の小屋のある場所に、冬になると集まる「魚」がいるというのだ。もちろん、夏場は芹田を占める水中にいたのだが、冬になると集まってくる。これは「湧水」の持つ水温変化があまりないという特性によるものだ。つまり、湧水の湧き口以外は凍結してしまうということなのである。

私は沢で、魚類は「イワナ」しか見たことがなかったので非常に驚いた。それは「富魚（トミヨ）」である。これは硬骨魚綱トゲウオ目トゲウオ科トミヨ属に属する魚で、冷帯を中心に分布している。世界で10種程度が知られているだけである。

日本では数種が「北海道から青森、秋田、山形、新潟、富山、石川にかけて分布」している。「トミヨ」は、海水、淡水に生息しているが、冷水を好むため、日本では、水温の低い湧水池やそれに近い流域などの淡水環境に生息している。

このため、水質の変化や濁水の影響を受けやすい魚である。各地で絶滅の危機に瀕している生き物で、保護活動が行われているそうだが、「一町田のトミヨ」は大丈夫なのだろうか。

「トミヨ」はその格好も不思議な魚だ。背ビレの前半では、棘（とげ）の間に膜がなく、ヒレではなく棘が並んでいる。危険を感じると棘を逆立てるのである。

もう1つ不思議は、産卵期になると、オスが水草類を集めて、水中に鳥の巣のような大きさ数cmの巣を作る。そして、メスの「トミヨ」を誘う。メスが巣の中に産卵すると、オスが受精させる。ところが、その後のオスは健気である。オスは食べ物を摂らず、卵を守り、巣の中に新鮮な水を送るなどの世話を、つきっきりですするというのである。

私は、残念ながら、この「トミヨ」が「何トミヨ」なのかを聞き逃してしまった。もしこれが「イバラトミヨ」であるとしたら、絶滅の危険性が最も高い魚であろう。

戦後の土地改良事業や最近の住宅地造営で多くの湧水が失われた。農村環境の変化や宅地造成などで、弘前市街地の湧水も枯渇がひどい。これらが「イバラトミヨ」の激減を招いているのだ。

湧水や清水にしか生息できないのが「イバラトミヨ」なのである。湧水を守ること、これが「イバラトミヨ」を守ることでもあるのだ。

そして、このことが、「多面的な機能を持つ農村の自然環境の保全」ということでもあるだろう。別な言い方をすれば、「農村の原風景を残す」ことでもあるだろう。

次に報告したのは県イヌワシ調査隊のリーダーで本会会員でもある飛鳥和弘氏である。演

題は「岩木山の猛禽類」である。

「食物連鎖」の頂点に位置するイヌワシやクマタカなどの生息地や営巣とその場所、子育てなどを説明しながら、彼らの餌であるウサギや蛇とその他の動物の関係・連鎖を説明した。小原先生の講演の中に「出てきたイタチ」などの肉食哺乳類は、これら猛禽類の餌とはなっていないとのことだった。主な餌は蛇だということだ。

私は「ヘビ」の餌を考えた。彼らの餌は「ネズミ」や「カエル」であろう。もしも、「ヘビ」が餌として大量に捕食されたら、「ネズミやカエル」のこの生態系における役割はどうなるのだろう。「ネズミやカエル」がどんどん増えることになったら「生態系のバランス」が壊れてしまうのではないだろうか。

最も興味の惹かれたものは「ハチの巣を襲うタカ（今日の写真）」である「ハチクマと蜂」の関係と、その「蜂たちと虫」の関係であった。

「ハチクマ」について若干補足しよう。全長はオスで 57cm、メスで 61cm であり、体重はオスが 510 から 800g、メスが 625 から 1050g であるとされている。

体色や斑紋の個体差は大きく、上面は暗褐色であるが、体下面と下雨覆の羽色は白色から黒褐色まで様々であるという。

斑紋の出方も無斑から横、縦まで変異があり、オスには尾羽に太い 2 本の黒帯があり、メスには 2~3 本の細い黒帯があるそうだ。

「ハチクマ」はカラスよりも一回り大きい。首が長いことや、翼の幅が広く体に比べて長いことなどから、他のタカ類と区別することが出来る。

繁殖期に「ハチクマ」が襲うハチの巣は、ミツバチなどのハナバチの仲間ではなく、強力な毒針を持つ肉食性のスズメバチの仲間だ。樹上に巣を作るコガタスズメバチの巣も襲うが、特に「クロスズメバチ」という地中に巣を作る小型のスズメバチを襲う。先日、NHK ハイビジョンで放映していたからご存じの方も多いただろう。

「ハチクマ」は「クロスズメバチ」の巣を見つけると、長くて大きな足を使って地中にある巣を掘り起こし、中にいる幼虫やさなぎを食べたり、巣盤ごと持ち帰り、ひなに与えたりするのだ。

巣を掘り出す時に、どうしてスズメバチに刺されないのかについては、「ふさふさした羽毛や硬い皮膚の所為」だとか「ハチを寄せつけないような独特の臭気を出す所為」などの説もあるが、よく分かっていない。

「ハチクマ」が「クロスズメバチの巣」を襲う理由は、栄養価の高い「ハチの子（幼虫）」をひなに与えるためである。「ハチの子」を食べるひなは糞をする回数が少なくなり、成長もとても早くなるといわれている。親にしてみれば「糞」を巢外に運び出す手間と採餌と餌運びの軽減という一石二鳥の効果があるというものである。

ハナバチ以外の「ハチ類」の餌は「昆虫」である。もしも、「ハチクマ」が大量に渡ってきて、大量に「クロスズメバチ」を捕食したら、その餌となる昆虫が大発生しないのだろうか。昆虫の中には、勝手な話しだが人にとっての「益虫」もいる。

食物連鎖の「一つ」に変化があると「連鎖」は瓦解する。ハチクマたちはどのようにして

「食物連鎖」を壊さないように工夫しているのか、そこを知りたいと思った。

次の報告は、これまで「津軽半島」や「岩木山」で、「サル」の生態とその動向」を調査・研究をしてきた元教員で本会会員でもある笹森耕二氏である。演題は「岩木山に分布を広げた猿」である。

私が岩木山と関わりを持ち始めた今から 40 数年前には「岩木山」にはサルがいないといわれていたものだ。ところで、私が最初に岩木山でサル」の群れに出会ったのは 1986 年である。

その場所は、その後何回か目撃したブナの森の中でなく、環状道路沿いの田んぼであった。詳しく言うと、長平を過ぎてから、白沢部落に降りていく峠の手前である。

その当時は、黒ん坊沼までは行くことが出来たが、まだ石倉・松代に分岐して抜ける車道がなかった。もちろん、この環状道路も、舗装部分は岳から弥生までぐらいで、残りの大半は未舗装の砂利道であった。自動車の通行も非常に少ないものだった。私は当時、「岩木山一週歩こう会」というものを主催し、毎年少なくとも 1 回は、この環状道路を踏破していた。

アスファルト舗装の部分が次第に長くなっていった。いつの間にか、その「田んぼ」は重機で掘り返されて、その後畑地になり、現在は原野化している。そして、そこで「サル」たちと遭うことはなくなってしまった。

それから「サル」の群れと遭うところは、この場所の上部にある「二子沼」に続くブナ林の中である。単独行動の「離れサル」に出会うことはこの「山域以外」でも度々あるが、群れと出会うことは「岩木山の北西域」以外ではまずないのである。

これには訳があった。それは私が単なる登山者であり、その守備範囲が「サル」の生息調査」という目的を一義的に持っていないことに因るだろう。

それでも、登山道のほぼ無いこの北西域には「二子沼」というすばらしい自然景観と貴重な水辺植物が豊富なのでしばしば訪れているし、前述したように環状道路を十数年連続して歩いてはいたのである。

笹森氏は、最近の調査で、「岩木山には大きな群れが 3 群、南西から北西にかけて生息している」と報告した。

ここで言う「北西にかけて」という場所は私が確認しているところと同じである。二子沼からブナ林、環状道路を跨いで、鱒ヶ沢町芦菴部落にかけての範囲である。

南には松代部落から入る「松代（大ノ平）登山道」がある。この尾根では、秋にヤマブドウを食べているクマに遭遇したことはあるが、まだサル」の群れには出会っていない。

この登山道には二子沼からの道がある。沢を挟んだ向かい尾根なのだから、「北西域」の群れ」が移動してきてもいいように思うのだが、いまだに出会えないでいる。なお、この道は、現在、廃道化している。

南西にはスカイライン自動車道路や岳登山道がある。この尾根やブナ林内でも、「サル」の群れ」とはまだ出会っていないのである。

断っておくが、笹森氏は言葉で「南西から北西」と言ったわけではない。オーバーヘッド

プロジェクター画像で示した地図上の範囲がそうだったのである。もちろん、私の見間違いもあるだろう。

ただ、その画像が示す「三つの群れの生息」範囲は、白神山地から日本海に向かって「北上」する「中村川」に沿っていたことは確実である。

この群れは、恐らく「西目屋村の桧森」方面や「旧岩木町の中村川上流部」、「鱒ヶ沢町の中村川上流部と赤石川に挟まれた尾根」方面から移動してきて、この場所を「生活の場所」としたものでしょう。

桧森氏の見解と私の考えは、この点で一致している。生活の場所にするには、その場所に「確定的」な「餌」がなければいけない。

その「餌」が、人間によって「生産や栽培された」ものである場合は、群れの移動、つまり「サル」を引き寄せた理由は、「人間の行為」ということになる。根本的にはこれは「餌付け」行為と同じだろう。

天然記念物である「下北半島のサル」の捕獲や駆除も、観光目当ての「人の餌付け」の結果である。クマやシカの捕獲や駆除も、その大半は「餌付け」等の学習から、彼らが人に近づき過ぎた結果である。この点でも私は桧森氏と同じ見解だ。

桧森氏は言う…。

一端、移動してきて、その場所に群れとして定住したものの「完全な駆除」は出来ない。間引き的な駆除は、その群れの中の「弱い個体」が対象となるので「群れ全体の繁殖能力」は低下しない。「強い個体」は容易に捕獲されない。

人間が栽培するものが「餌」である場合、その「餌」の栽培を止めると「別な餌」を人里に求めるようになる。これはサルのみならず、クマも同様だ。

昔といっても、明治時代くらいまでは「サル」は人の食料の対象であった。つまり、人は「サルを捕獲」して「食べて」いたのである。

ところが、食糧事情の変化で「サルを食べる」ということがなくなった。「サルが必要以上に繁殖することを人が抑止し、自然の餌で間に合うバランスを保っていた」のであると…。

逆にいうと、「サル」にとって「人」は天敵だったわけである。『「人」は恐ろしいものだから、近づくな』がサルの掟だったわけだ。

「サルの食害」を防ぐには「このような関係を人間側が構築する」しかないのである。電気柵などで防備しても、費用対効果は薄い。無駄な努力かもしれない。

サルと共存するには生活の場をお互いが違えねばならない。時間をかけて『「人」は恐ろしいものだから、近づくな』をサルに学習させるしか、手立てはないだろう。

別掲写真の説明

1. (3月7日に開かれた「岩木山の生き物・重層型シンポジウム」の一コマである。オーバーヘッドプロジェクターを使っているので会場内の前の方が暗い。その所為で、講演している

小原良孝先生の姿がはっきりと見えないのが残念である。

この会場、弘前文化センター中会議室は定員が 100 名である。ほぼ、定員に達した来場者がいたものと思う。）



2. (「岩木山の生き物・立体、総合的重層型シンポジウム」案内の立て看板である。弘前文化センターの正面入り口に設置されたものである。今回も飛鳥さんの作品である。



3. (7日のシンポジウムで話題になった「生きもの」、ワシタカ目タカ科のハチクマと霊長目オナガザル科のニホンザルである。



ハチクマは中央アジアから東南アジアにかけて分布し、日本には夏鳥として渡って来る。5月から10月にかけて見られ、秋にはまた東南アジアに帰って行く。北海道、本州、四国、九州で見られ、丘陵地から山地にかけての森林で繁殖する。

名前の由来は「ハチを食べるクマタカ（熊鷹）に似たタカ」を意味していることによる。ハチ類を主食とするが、昆虫やカエル、トカゲなども餌とする。

ニホンザルは世界でもっとも北限に住むサルで日本列島の固有種である。数十頭の群をなして生活する昼行性で、夜間は安全な木の上で眠り、花芽や新芽、草、果物を食べる雑食性の哺乳類である。この写真は親子だろうか、兄弟だろうか。

グルーミング [grooming] をしているところだ。「グルーミング」は、哺乳類の場合は「毛づくろい」と訳され、鳥類の場合は「羽づくろい」と言われる。

元来は手や口を使って、ゴミや寄生虫をとりのぞき、体を清潔にするための行動だ。しかし、仲間に対してグルーミングをするときには、大切なコミュニケーション行動になっている。多くの動物では、母子や群れ仲間のような特別な関係でしか行なわない。）

「シンポジウムあれこれ雑感」

・何故なのだろう。マスコミの取材が全くなかった。この「シンポジウム」の「開催」を知らせる案内や記事は各新聞社も積極的にしてくれたのに、その内容と「結果」を伝えることをしないのは矛盾することではないのだろうか。

・私たち主催する側では自動車で「来る」参加者が多いことを考えて、広くてしかも駐車料

金が無料という「会場」を求める。

今回も会場決定には、このことを第一義として、第二義的には徒歩でもやって来られる近場を念頭に置いた。

だが、1ヶ月以上も「前」だというのに、150名ほどが入る「会場」はなかなか見つからなかった。それは、「会場という建物」はあるのだが、すでに他の団体との「使用契約」が結ばれていて「使えない」というものだった。

この会場は「探しに探した」結果、7番目によく「空いている」会場として、見つけたものだった。

この会場は弘前市街地のほぼ中央にある。徒歩でもやって来られる。それはいいのだが、自動車で来る人にとっては「駐車料金」という負担を強いるし、狭いので多くは駐車出来ないという制約がある。

この懸念が的中したのだ。当日、別な「芸能発表」らしき催事が同じ建物の大ホールであった。そのために、「駐車場」は混雑を極めた。係員から待ち時間が30分から1時間もかかると言われたと、遅れて本会場にやって来た人が言っていたという。

それを聞いて、本会幹事が駐車場入り口まで行って確認したところ、「遅れてしまったので、このまま帰る」と言う人が30名ほどいたそうである。

その人たちには申し訳ないことをしたと思っている。この人たちが会場に「現れて」くれたら、きっと会場は埋まり「立ち見席」も出来たであろうと考えると、残念ではようがない。